振り込め詐欺

持丸　文雄

振り込め詐欺事件は後を絶たない。今日も何処かで無辜の老人を騙し、虎の子の貯えを巻き上げていることだろう。これまでマスメディアを中心に、それこそ社会を挙げて注意を喚起しているにもかかわらず、いとも簡単に騙されてしまう。哀しいかな、老耄のなせるわざか。事件の報道を目にした者なら誰しも、次のような感慨を持つに違いない。被害を受けた老人には気の毒千万だが、自分だったら、こうも易々と同じ手は食わないぞ。試しに騙せるものなら騙してみよと。斯く云う私も自信満々で、折あらば犯人に一泡吹かせてやろうと、振り込め電話を心待ちにしていた一人だ。

ある夜のこと、自宅の電話のベルが鳴り、家内が受話器を取る。

「茂男、いったいどうしたの。よほど具合が悪いの……。今お父さんに代わる」

促されて受話器を取る。

「熱でもあるのか」

「うん、だるくて動けない」

口をきくのも辛そうだ。

「インフルエンザか」

「……そうだと思う」

「薬はあるのか」

「うん、あるから大丈夫。何とかなるよ」

「動けないようでは一人で部屋にいても何ともならないだろう」

家内がたまらず口をはさむ。

「これから二人ですぐに薬をもって様子を見に行くと、茂男に伝えてください」

家内の顔は心配の余り引きつっている。

心配しなくていいと家内を制して、

「茂男、これから車でそちらに行こう」

「いや、大丈夫だよ」

「何が大丈夫なものか。よほど具合が悪いのだろ」
「いや、もういいよ。良くなってきたから」
何故か、相手の困惑ぶりが受話器を通して強く伝わってくる。
「そうはいかない。とにかくすぐ行くから、おとなしく待っていろ」
「……いや、もういいから」
「何がいいんだ」
「……」、ガチャリ。
「もしもし……もしもし。……切れちゃった」
「此方からすぐ茂男にかけ直してください」
家内の動揺は尋常ではない。
慌てて茂男の携帯電話を呼び出す。
「もしもし、茂男か」
「そうだけど、何か用事」
おや、普段と変わらぬ口ぶりだ。
「たった今、お前から電話があったんだけど。具合が悪いのではないのか」
「いや、電話していないし、どこも具合は悪くないよ」
「そんなはずはない、確かにお前からの電話だった。本当に電話してないのか」
「してないよ。振り込め詐欺じゃないの……」
呆れている様子が目に浮かぶ。
「……ん、そうか。でもお前の声だったがなぁ……」
「危うく騙されるところだったね」
「ともかく、何事もなくてよかった。まあ、元気でがんばれよ」
「わかった。じゃ、これで」、ガチャリ。
「……ん、確かに茂男の声だったよね」
「私もそう思いました。間違いなく茂男の声でした」
家内も半信半疑の面持ちだ。
狐につままれるとはこのことだろう。聞き慣れた我が子の声を聞き違えるなど、一体あり得ることだろうか。未だボケていないと自負していたのに、自分では気付かぬうちに進行していたのか。それまでの自信がガラス細工のように砕け散る思いがした。事態を理解しようとする思考と心細さと戸惑いの入り混じった感情が錯綜す

る。

ようやく気持ちが落ち着くと、あらためてこのたびの一連の経緯を振り返ってみる。そこでハタと、思い当たった。これまで慣れ親しんできた聴診器による心音聴取と同じメカニズムではないか。

そうだ、人間の耳は聞きたい音だけを聞き取ることができるのだ。音声の取捨選択能力は、イギリスの心理学者コリン・チェリーが一九五三年に提唱した「カクテルパーティ効果」と呼ばれるものである。多くの人で賑わうカクテルパーティのような騒がしい環境でも、注意を集中することにより、自分が聞きたいと思う相手の声だけを選択的に聴き取ることができる。逆に注意を向けるのをやめると周囲の音に紛れて聴こえなくなったりする現象で、選択的注意と呼ばれる認知機能を指す心理学の概念だ。

ところが、同様の選択的注意による情報処理過程は、時に誤作動を起こし、いわゆる「聞き違い」を引き起こすことがある。そのために実際にはその音声が存在していないにもかかわらず、聞きたい人の声の特徴から口癖まで、「実際に聞こえた」と錯覚してしまうのだ。

つまり、電話口で息子の姿を強くイメージすると、この音声の取捨選択能力に歪みが生じる。それで電話口から聞こえてくる声が、あたかも息子の声であるかのように錯覚して認識されるというわけだ。たとえば電話口で「加藤」ですと名乗られ、此方はてっきり旧知の「加藤」のつもりでしばらく話しているうちに、実は別の「加藤」と気付いて狼狽する。こんな経験は、誰でも一度や二度はあるはずだ。

振り込め詐欺被害は、必ずしも老耄のなせるわざではない。振り込め電話は、人間が本来持っている音声の取捨選択能力を逆手に取った、実に高等な心理作戦だったのだ。

今回の教訓は、電話があったら折り返し此方から電話をかけ直して、直接本人に確認すること。人間誰しも電話口の声を錯覚して息子の声と聞き違える恐れがあるからだ。その前に、電話口で此方から駆け付けて一緒に善後策を協議しようと強く迫ろう。もしも相手が詐偽目的ならば、現場に乗り込むぞと言われた途端、一目散に退散すること請け合いだ。

本稿を通じて、振り込め詐欺事件被害者に対する世間のあらぬ誤解を払拭することができれば幸いである。

持丸　文雄

略歴

医師・慶応大学医学部卒。産婦人科医。２０１３年３月平塚市民病院副院長を最後に定年退職し、現在に至る。